

主の奉獻 ルカ 22：22～40（今回の説教は『みことばを生きる』岩島忠彦神父 “お宮参り”を参考にしています

「初めて生まれた男の子は神様のもの」という考えに基づいて、両親は生まれて40日目に自分の子を神殿に捧げます。といっても「儀式」です。実際は神殿に子羊1匹と山鳩一羽（余裕のない人たちは鳩二羽）を捧げて、神様から自分の子を買戻してきます。本気で、神様に自分の子をお捧げもできないので連れて帰ります。「本音」と「建前」の違いがあります。

ヨセフとマリアも、習慣にのっとって神殿に行きます。けれども、思いもかけず、シメオン、アンナという老人が現れます。2人は「建前」ではなく、実際に神に捧げる生き方をした人たちでした。イエスさまが成人して、本当に神の人となり、すべての人に仕える者となることを予告し、神を賛美します。特にシメオンは、イエスさまの奉獻が本物になるほど、苦しみに満ちたものになることを生々しく予告します。とはいえ「儀式」を終えるとナザレに帰っていきます。

ルカ福音書では、イエスさまの幼年時代の神殿にまつわるもう一つのエピソードがあります。逾越祭の巡礼で、エルサレムに上がったとき、そのままイエスさまが神殿に留まった場面です。両親は、必死になって探し、やっと見つけた時の親子の会話が印象的です。マリアさまは「どうしてこんなことをしてくれたのです。お父さんもわたしも心配して、あなたを探していたのです。」と言うとイエスさまは「どうしてお探しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、ご存じなかったのですか」（2：48～50）と答えます。12歳になったイエスさまには「建前」と「本音」のギャップがありません。神様に捧げられた姿そのものになっています。けれども、ここでも実際は、イエスさまは両親に従って故郷に帰って、親に仕えて過ごします。マリアさまは、常識と息子イエスの言動の違いに気づき、心に留め思い巡らすようになります。

イエスさまは、30歳を過ぎて故郷のナザレを出て、父なる神様にすべてを委ね、み国のために自分のすべてを捧げします。最後は十字架上で血の一滴までも捧げつくしました。あの「奉獻」は、文字どおり実際の「奉獻」になります。

「主の奉獻」を祝うわたしたちは、イエスさまと同じように、神様に自分をお捧げする決意を新たにします。洗礼、修道誓願によって、神様のもの、主キリストのものとなったことを確認します。「建前」と「本音」のギャップがないことが、キリスト者の証になります。「主の奉獻」の祝日に、誓願を立てる人たちもいます。その人たちにとって、誓願を生き抜く力を願うのにふさわしい日です。修道者に限らず、私たちはみんな、神様から出て、神様に属して、神様に帰っていきます。

イエズス会に入る時にある神父さんがこう言ってくれました。「大きなことは捨てられるけど、小さなことが捨てられない」 家族を持たない、財産を持たない、長上の意見に従う、など大きなことは捨てますが、「この使徒職は嫌だ、あの人と一緒に嫌だ」というように小さなことは捨てられない。そうならないように願いたいです。最後にわたしの好きな祈りをご紹介します。イグナチオの「自分を捧げる祈り」です。

主よ、わたしの自由をあなたに捧げます。わたしの記憶、知恵、意志をみな受け入れて下さい。わたしのものはすべて、あなたからのものです、今、すべてをあなたに捧げ、み旨に委ねます。私に、あなたの愛と恵みを与えて下さい。わたしはそれだけで満たされます。それ以上望みません。

この祈りがわたしたちの信仰生活に実現するよう願ってミサを続けましょう。